
輪廻戦記

豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻戦記

【ZPDF】

Z0663D

【作者名】

豊

【あらすじ】

時代は仮想146年、当時の大国、霸國の村に碧眼赤髪の赤子が産まれた。その赤子が成長し、天下を分ける人間になることに……

第1回 生誕（前書き）

暇な時に少しづつ書いた物です。

第1回 生誕

仮想146年春

人類が生まれてまだ間もない頃、ここ倭はいくつもの国に別れ、各國はより良い土地を求めて、他国を攻めて領土を、増やそうとしていた。

その国の1つ、霸國は大国でありながら、各村の統率に欠け、内戦も度々起きているという危機に晒されていた。

と言うのも、今の国王、才和サイカは2代目で、初代才霸サイハの息子なんだが、父が偉大すぎて愚君と罵られた挙げ句、各村長が独自の政治を行い始めるということにまで、発展していく、もはや再建は不可能と言われた。

そんな才和が住んでいる村、霸叉村に村中を蒼然とさせる事件が起きた。

その事件とは、ある女性が産んだ子どもが犯人だ。

碧眼赤髪、さらに泣き声をあげず目をはつきりと開けて生まれてきた。

ある村人は神の子といい、またあるものは悪魔の化身と言った。悪魔の化身、そう言われたのには深い訳がある。

産まれた直後、母親が死んだのだ。

これを吉と取るか悪と取るか。

それで霸叉村は2つに割れた。

元々霸叉村には霸國全体の3分の1の人が住み、霸國全体の食料がここに集まつてくる。

それだけ大きい村なのだが、この赤子が生まれたことにより、半分以上他の村に移り住んだ。

残つたのは必要最低限の人員と才和のみ。

重臣は他の村に移つた。

内政は潤つているが、人材に欠ける。

それは大国に付き物の悩みである。「はて、どうした物か。」才和は困り果てた。

知将あるか、勇将も1人もいない霸叉村。

運命を分ける1つ目の道が前に現れた。

「赤子を殺すべきか否か。もし殺せば、今度は私が殺される……。あどうした物か……。」

大きな家の中を右往左往する才和。

それに見兼ねた母君が才和の頬をひつぱたいた。

「何を迷うておるのでですか！ それでもあなたは才霸の世継ぎですか！」

母君の言葉は才和の心に大きく響いた。

霸王としての品格を忘れていた才和。

霸王を間近で見てきた母君。

才和はうんともすんとも言えなかつた。

「母上……。分かりました。あの赤子を山に捨ててきます。」

「それで……後悔しないのですね？」

「はい。」

そう言つて才和は家を飛び出し、側近を連れて、あの赤子が住んでいる家に向かつた。

家の中には神の子と崇める村人たちが軽武装して、待ち構えていた。「才和様！ この赤子を殺すのでしたら私たちは、才和様を斬ります。」

「黙られよ！」

側近2名が前に歩んだ。

軽武装ながらも村人たちとは比べ物にならない。

側近が一步歩めば、村人たちは一步下がる。

とうとう、壁に追い詰められた村人たち。

「さあ、渡されよ。」

「いやじゃあ！」

村人たちは自棄を起こし、才和に斬りかかった。
瞬時に側近2名が切り捨てた。

鮮血が部屋中に舞う。

もちろん赤子にもかかっている。

そんな中でも赤子は泣かなかつた。

赤子を抱き上げ、家を後にする才和。
側近1名を呼んで、

「悠山に捨てて参れ。」

「はは。」

と申し付けて、自身は自宅に戻った。

「赤子は……捨ててきたのですね？」

家の中では母君がそわそわした様子で待っていた。
才和は返事をせず、個室に籠つた。

第1回 生誕（後書き）

寒いですね。そろそろストーブの出番ですね。

赤子が悠山に捨てられた直後、山にたまたま獵に来ていたが、霸国の隣の悠国の村人が赤子を見つけて、指でつづいていた。

「こりやあ、珍しい赤子だなあ。不佐様に見せてみよう。」

悠国悠山村

悠山村は悠山の山頂にあり、主な食料は魚と動物、そして木の実。人口も国力も霸国とは比べ物にならないが、村人1人1人が勇猛で、更に村全体が城の様になつており、攻めても、一度も落ちたことは無かつた。

故に、土地は悪くとも国力は並みに有し、優秀な勇将が多く、人口は少なくとも他国と並みに渡り合つてきた。

さて、あの赤子はどうなつたかと言うと、悠国の王不佐の家に持つていかれて、村人の注目的になつていた。

赤子を見た不佐は思わず唸つた。

「ふむ、確かに変わつてあるな。」

不佐、及び村人たちは皆注目し、物珍しそうに見ていた。

「長老を呼べ。」

「ここにおりますじや。」

長老は不佐の真後ろにいて、じっくりと赤子を見つめて、複雑そうな顔をして、

「不佐や、この赤子を誰にも渡してはならないぞ。跡継ぎにさせらるのじや。」

「しかし、私には息子が1人いますが……。」

長老は首を振つた。

「この赤子は正に神の子。この赤子は捨ててはならん。そして、大事に知略、武道を教えよ。さすれば、悠国が霸国すら食べてしまつであろう。」

それだけ言つて長老は家を出ていった。

残つた村人たちは複雑な顔をして、1人歯を食い縛つて、今のやり取りを聞いていた若干13歳の不佐の息子、不^{フリザ}理佐を見ていた。不理佐は顔を真つ赤にして、今にも怒りが爆発しそうだ。

「あんのクソジジイ殺してやる！」

怒り出して、短剣を持つて足早に出ていった。

誰にも止めることは出来なかつた。

止めることは出来ない。

それほど勇猛な男なのである。

長老宅

「ふ、不理佐様お静まり下さい！」

真つ赤な顔で短剣を片手に持つて、乗り込んできた不理佐に長老の側近たちは、不理佐の躯を抑えるが、13歳と言えど並みに力を持った不理佐、それに怒りが加わつたのだから抑えきれない。側近たちを放り投げた不理佐は無言で立つて、長老を睨み付けた。しかし、一切動じずそれどころか不理佐に威圧を加えていた。あまりの威圧感に不理佐は一步後退した。

長老と不理佐の間に不穏な空気が流れる。

「不理佐よ……ワシがあの様なことを本氣で思つてあると思つておるのか？」

「え……？」

いきなりすぎる問いに不理佐は戸惑つた。

なんと言えばいいのか分からず黙り込んだ。

勇猛な不理佐だが、いきなりの問い掛けにはかなり弱く、軍学もあり得意ではない。

「……儂はな、そなたに文武両道の君になつて欲しいのじや。この村で学のある者は儂だけじや。

しかし、儂も時間がなくてな。だからそなたにあの様なことを言つたのじや。無礼を許されよ。」

途中から長老は涙をこぼしながら語つた。

その涙は無駄では無かつた。

聞いている途中に不理佐は心を打たれ、涙を流し、鼻をすすつて聞いていた。

勇猛で馬鹿な不理佐だが、感受性が豊かで、情に流されやすい。

あの語りはその特徴を利用した長老の策だった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0663d/>

輪廻戦記

2010年10月28日05時53分発行